

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビ ジ ョ ン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

前年度学校関係者評価の主な内容 1.長期欠席者の減少に向けた取組の推進。 2.学力調査結果を分析して具体的な改善策を確認して成果につなげる。	児童生徒の現状 ・ 学びの伸びを把握する調査では、現状学年のレベルに達していない児童生徒がいる。また、無答率が高くなることに向き合えない児童生徒が多い。 ・ 小中ともに児童生徒が自ら動き、生活をよりよくしようとしている。 ・ 「体力づくりに取り組んでいる」肯定的解答が87％、新体力テストでは県平均を超えた割合が44％。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	スキル：・ 自己を認識する力 ・ 自己選択できる力 ・ 表現力 ・ 空間認知力 倫理観：・ 粘り強くやり切る力 ・ 挑戦し続ける力 知：自分の考えを持ち伝え合う子 徳：人の気持ちがわかり協力できる子 体：健康でねばり強い子 ・ 神辺西中学校区でめざす授業の姿を共有（主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善の実施） ・ 児童生徒による生徒指導（生活のきまり）の見直しの継続 ・ 神辺西中学校区における「21世紀スキル&倫理観」の評価規準による個に応じた指導の実施
--	---	---	--

ミ ッ シ ョ ン 伝統を現在に生かし、未来を生き抜く人を育てる。	育 成 す る 力 (21世紀型“スキル&倫理観”) め ざ す 子 ども 像	知 識 ・ 技 能 既習事項と新たな知識・技能を関連付け、思考・判断・表現の場で活用できる知識・技能として定着している。	思 考 力 ・ 判 断 力 ・ 表 現 力 課題解決のために必要な情報を収集し、比較・分類したり関連付けたりして、筋道立てて考え、表現している。	学 び に 向 か う 力 既有的の知識と関連付け、自ら課題を見つけ選択するとともに、学習の仕方や進め方を振り返り、次の学習や生活に生かそうとしている。
学 校 教 育 目 標 ひとりひとりの命を生かし 育てる教育の実現	現 状 ＜児童生徒＞ ・ 学力調査等において無答率が高いという課題がある。これに対して、「書く<考える>」授業を続けた。2022年度末には、「考えたことを文や言葉で表し振り返る」と、肯定的回答をした児童は84.5％である。 ・ 「人のために動くことができた」と自己評価する児童は90％である。学校や人のためになることを話し合う機会の中で、一人ひとりが考えて実行することができている。一方、自分の言動や友だちとの関わりを振り返り、友だちの気持ちを考えるという点に課題が見られる。 ＜授業＞ ・ 「書く<考える>」授業を一層充実させるため、教師が、教材研究力」や「評価力」を高め、児童一人ひとりの学びを見取り伸ばしていく必要がある。 ・ 児童の学びに向かう姿には、個人差があり、児童の発言に対して柔軟に対応し、学びを繋げていく教師のファシリテーター力を高めていく必要がある。	テ マ 研 究 め ざ す 授 業 の 姿	“対話”と“考えの再構成”を通した「書く<考える>」学びの実現 1 「書く<考える>」学びを軸に置いた授業 ・ 「対話」と「書く」を通して、自分の考えを再構成する授業を展開する。 ・ 「思考を動かす問い」によるゆさぶりを行う。 ・ 「書く<考える>」手がかりとなるフレームの整理を行う。 ・ 「何を書き、何を考えるか」を明らかにした教材研究と評価を行う。 2 自己の学び・成長の振り返り（自己認識） ・ 学習内容の振り返りに加えて、自己の学び方や成長を振り返る場面を、教育活動に位置付ける。 ・ 1時間の中で、単元の中で、何を振り返るのかを指導者が見通す。 ・ 「書く」ことを通して自分の考えを整理し、学ぶ楽しさを味わうことのできる授業 ・ 身に付けた既習事項を活用して、新たな課題を解決することのできる授業 ・ 友だちとの対話を通して、共に学ぶよさを実感できる授業	

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立神辺小学校

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)				最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	力 を 入 る	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	力 を 入 る	達成 評価	総合 評価	改善方策
1	“対話”と”考 えの再構成” を通した 「書く を 考 える」学び の実現	★	新 規	授業者が指導 事項を明確に し、児童が学び を実感できる 授業が日々、実 施されている。	①次の2つの場面 を授業に位置付 ける。 ・書くことで児童 が考える場面。 ・授業で学習した ことを児童が 振り返る場面。 ②各教科・単元の 本質について理 解を深められる ように、教材研 究を主とした校 内研修を行う。	・「日々の授業で目 的を明確にした 振り返りを実施 している。」授業 者を85%以上 にする。	□アンケートの結 果、肯定的評価 は100%である 。授業者は、振 り返りの目的を 考え、書くこと を位置付けて授 業に臨むことが できている。 □国語・算数科の 授業研究を学期 に1回ずつ実施 した。夏季研修 では、教材研究 を行い、国語科 の「読むこと」領 域の学習を系統 立てた。	4	4	・内容を深化させ るため、次の2 点に取り組む ①「条件」を提示 し、振り返りを 書く場面に授業 に位置付ける。 ②「書く／考える」 内容の具体化を 軸に、教材研究 を進める。 ・授業研究を進め る過程で、系統 表を活用・修正 し、指導事項や つきたい力を明 確にする。	□アンケートの結果、肯 定的評価は90%であ る。「条件をつけた振 り返り」を書く場面を 位置付けることが定 着してきている。また、 単元の何時間目か によっても目的が変 わることや、振り返り の共有の仕方等につ いて疑問や関心が広 がっている。 ◎振り返りの内実を授 業者が具体的に描く ことで、指導事項が明 確になっている。児童 アンケート「学習を通 した考え・振り返りを 書く」の肯定的評価は 92%である。	4	4	4	・「書く を 考える」授業 を軸にしなが、授 業者の授業に関する 関心に広がりが見ら れる。「書く を 考える」 授業を基礎とし ながら、各授業者が 自らの授業の重点を 意識した取組を推進 していく。 ・基礎基本の学力が定 着に課題がある。そ のために、思考の深 まりや、児童間の共 有がうまく機能しな いケースがあった。 基礎基本の向上へ向 けたそれぞれの取組 や手立てを共有し、 学校としての手立て を考案する。
1	“対話”と”考 えの再構成” を通した 「書く を 考 える」学び の実現	★	新 規	児童が、友達 の気持ちを考え て行動するこ とができる。	①課題未然防止の ために、児童が 友達を大切にで きる環境づくり を行う。そのた めに各学級でエ ンカウンター活 動を行う。活動 の振り返りを行 い、仲間との関 係の変化に気付 かせる。 ②「すてきな神辺 っ子」や児童の 課題から、毎月 1つの生活目標 を設定して学校 全体で守れるよ うに取り組む。	・「周りの人の気持 ちを考えて行動 できる」と自己評 価する児童を8 5%以上にする。	□各学級におけ る係活動や当番 活動の充実によ り、周りの人の 気持ちを考え て行動できた児童 は91.3%とな った。 □「すてきな神 辺っ子」の項目 の中の大きな声 であいさつする ことができた児 童は79.9%で あった。	3	4	・学習できる環境、安全・ 安心な環境を整 えることにより、生徒指 導の三機能を高める。 机上のものは必要最 小限にし、教室環境を 整えた学級を通信等 で広める。 また、各学級で行 ったエンカウンターを 異学年へ紹介をし、取 り組んだ成果の交流 を図る。 ・「目を見て、相手に聞 こえる声であいさつ をする」ことを目標に 掲げ、教職員自ら率先 してあいさつを行っ ていく。また、「すてき な神辺っ子」の内容項 目を児童会中心に見 直し、神辺っ子週間 (生徒指導週間)を設 定する。	□生徒指導規定の見直 しにより、安心して安全 な環境づくりを行う ことができた。“学習 に必要なもの以外は 机に出さない”や “廊下を走らない”等 ポスター掲示や放送 による声かけを適宜 行った。また、各学級 で「いいところ見 つけ」や「仲良しポスト」 など児童同士で肯定 的評価を行うことが できた。 □「すてきな神辺っ子」 の項目と児童実態を 踏まえ、毎月児童会よ り生活目標を提示し た。各学級で毎月振り 返しを行い、自分た ちの行動を考えるこ とで、徹底を図った。 ◎取組を通して「周り の人の気持ちを考え て行動できる」児童は 94.4%となった。	4	5	4	・各学級でのエンカウ ンター活動は引き続 き行い、児童の自己 肯定感を高めてい く。 ・「大きな声であいさつ をする」という項目 の達成度が低く、登 校指導の際もあいさ つをする児童が少な い。次年度に向けて、 場面に応じたあいさ つができる児童の姿 をめざしたい。 あいさつの具体的な 場面や方法、その場 に応じたお辞儀や会 釈など細かな設定を 行い、学校全体から 地域全体へ広めてい く。

4	“対話”と“ 考えの再構 成”を通し た「書く≧考 える」学び の実現	★	継 続	児童が、積極 的に運動に親 しみ、体力向上 ができる。	①本校の体力的課 題の「投運動」を 強化するため に、多様なボー ルを投げる機会 を設ける。また、 「体育ファイ ル」を活用し、自 己の運動能力向 上を見える化す る。 ②外で遊びたくな るような用具を 充実させたり、 遊び方の提案を したりする。ま た外サーキット を設置し、休憩 時間にも運動で きる環境整備を する。	・「運動に取り組 んでいる」児童の割 合を85%以上に する。	□運動に取り組 む児童の割合 は 80.8%であ る。 □体育の授業前 にサーキット 運動の一環と して投運動の 能力向上を図 ることができ た。サーキット の運動を休憩 時間にする児 童が見られた。 □ドッジボール、大 縄、ソフトフォ ームボール、ソフト バレーボールを 配布し、外遊び を楽しめる環 境を作った。 □校舎内のクラ ンクに運動コ ーナーを設置 したことで、握 力を鍛える児 童がいた。	3	3	・新体力テストの 結果等から自己 の体力的課題を 見出せるよう に、ふり返りシ ートなどで体育 ファイルを活用 していく。 ・遊び方の提案が できていなかっ たため、体育委 員中心にしてい く。また、サー キット運動のマ ンネリ化を防ぐ ため、定期的に 改良していく。	□体育ファイルの活用 により、単元の中での 自己の伸びが見える 化した。このことか ら、「前回よりも記録 が伸びた。」と成長を 実感するふり返りを 書く児童が多くなっ た。 □体育委員会が遊びの 提案を 5 つすること ができた。大綱及び大 会では、クラスごと に目標を決めたり、練習 に毎日取り組んだり するなど、進んで運動 に取り組む児童がい た。 □ボールを各学年に配 布することで、投運動 の機会を増やすこと ができた。 ◎運動に取り組むこと に対し、肯定的評価を した児童の割合は、 85.8%である。	4	4	4	・ふり返りシート は、低学年が文章 でふり返ることが 時間的にも学習内 容的にも難しく改 善が必要である。 ・遊びの提案を学期 に 1 回はする。ま た、参加児童が固 定化する傾向があ るため、多くの児 童が参加したくな るような企画を、 児童会や委員会を 中心に考える。 ・校内クランクの運 動コーナーを適宜 改善し、児童が思 わず動いてしまう 仕掛けを作る。
5	児童の教育 環境をデザ インする取 組を推進す る。		継 続	幼保・小・中の 「学びのつな がり」を意識し た連携を図る。	①学力調査から 見える課題を 共有し、小中が 互いの授業の 参観・協議を行 う。 ②授業参観及び 協議を通して、 子どもの学び の姿及び指導・ 保育の具体を 共有する。	・小中合同研修会、 幼保小合同研修 会を年間2回以 上行い、互いの 授業・保育の様 子を1回以上参 観することで、 幼児・児童・生徒 の学びの姿の具 体について協議 する。	□小中合同研修では 小学校の授業を、 幼保小合同研修で は、互いの授業・ 保育を参観でき た。 □「書く≧考える」学 び、小中の繋がり、 数・ことばの学び 等、視点を明確に して参観し、子ど もの具体的な姿を 通して協議ができ た。 □参観・協議を通し た学びを教務だよ り等に整理し、連 携校に送ること で、職員の学びを 共有できた。	4	3	・今年度の学力調査 結果・分析を共有 し、課題や方向性 を明らかにする。 その観点で中学校 の授業参観・協議 を行う。 ・幼保小では、取組及 び幼児・児童の学 びの姿を記録に残 し、互いの実践の 共有・協議を行う。 ・参観日、運動会、学 習発表会の案内送 付や、新一年生交 流会を通して、子 どもや職員の交流 も意識して取り組 む。	□小・中、幼保小が互い の教育・保育を参観 し、学びの継続や子ど もの姿の具体につい て協議できた。 □小中合同研修を2回 行い、互いの結果・分 析を共有し、書く≧考 える学びや学びの繋 がり協議した。 □幼保小合同研修を2 回行い、「数・ことばの 学び」という重点課題 を持ち取組を進め、協 議することができた。 ◎共有の視点、重点課題 を設定して取組を進 め、子どもの学びの姿 の具体をもとに協議 することで、学びの繋 がり意識した連携 を図ることができた。 ◎研修内容のまとめを 中学校（同校区）に送 ることで、幼保小中の 取組を繋げた。	4	4	4	・共通の視点をもっ て互いの授業・保 育を参観し、子ど もの学びの姿の具 体から協議するこ とを継続する。 ・「知る」（互いを知 る）＋「繋がる」（繋 がりの可能性を探 る）という観点で の職員の連携と、 子ども同士の交流 とを整理して進め る。

				教職員一人一人の働き方に対する意識の醸成を図る。	①「業務改善アイデア」を定期的に出し合い、協議・実施するとともに、自分／組織の視点で業務改善について振り返る。 ②超過勤務45時間以内を目指し、各主任を中心に学年間で声かけを行うとともに、入退校時刻表を活用し勤務時間の自己管理を行う。	・職員アンケートにおいて、「子どもたちのために使える時間をつくる工夫をしている」と肯定的評価する職員を80％以上にする。	□アンケートの肯定的評価は96％である。 □「業務改善アイデア」を企画委員会や学年主任会で取り上げ、それぞれが組織づくりに参画した。 □声かけや、入退校時刻表を活用した時間の調整、学年の退校目標の設定等に取り組んだ。	3	4	・見通しをもって仕事（自分／組織）ができるよう、主任を中心に早めの声掛けや相談を行い、学年会や推進部の充実を図る。 ・毎月15日に各自が入退校時刻表を確認し、45時間を超えないための見通しをもつ。	□企画委員会や学年主任会、日々の学年会を通して、学校や学年の動きに対しての見通しを共有した。主任を中心に声掛けや相談ができた。また、気づいた者が行動に移すとともに、Google classroomを活用して情報の共有を図った。 □退校時刻表を活用して時間を調整する、主任を中心に声掛けを行う、仕事の優先順位を付ける等の工夫を行った。 ◎アンケートの肯定的評価は90％であり、一人一人が働き方を工夫している。	4	4	4	・「見通し」と「目標」を持った働き方の実現を目指す。 ①学年会等による「見通し」の共有を継続する。 ②学校教育目標を具体化し、それに応じた職員一人一人の自己「目標」の設定を行う。この目標は、2024年度業績評価と関連付ける。各自が目標に対して探究を進められるようにする。
--	--	--	--	--------------------------	--	--	--	---	---	---	---	---	---	---	---

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]	
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100％以上の達成度 十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80％以上100％未満の達成度 概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60％以上80％未満の達成度 ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40％以上60％未満の達成度 あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40％未満の達成度 目標を達成できなかった。